

今週のメニュー

■トピックス

◇プラスチック出前授業のこの一年

■随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(4)

木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇プラスチック出前授業のこの一年

中学校理科の授業で正式にプラスチックが取り上げられるようになって、3年が経ちます。業界で組織してプラスチック教育連絡会の一員として、塩ビ工業・環境協会(VEC)は、プラスチックについてその特徴とそれを活かした利用などを実例で示すことで、プラスチック授業に貢献してきたことは、本メールマガジンでもときどき紹介しています。年度の締めくくりとして、この一年間の活動を振り返ってみました。

本年度は中学校4校と大学1校の約400名の皆さんと接することができました。中学校のカリキュラムにもよりますが、プラスチックが授業の中で取り上げられるのは夏休みが終わった後になることが多いようで、9月、10月ごろの出前授業のご要望をいただきます。



出前授業風景

授業の内容は、プラスチックの原料である石油の話から始まり、プラスチックが身のまわりで当たり前のように使われるようになってきた経緯やプラスチックの種類と特徴、日本の特殊なプラスチックが世界中で活躍している例などを紹介しています。また、話しを聞いてもらうだけではなく、クリップをモノマーと見立て、それを繋いだポリマーの構造イメージを掴んだり、プラスチックの密度の違いを調べる実験をやってもらったり、プラスチック製品の作られる様子のビデオ

を観てもらったり、いろいろな製品を手にとって触ってもらうなどの体験型の内容も取り入れています。かなり盛りだくさんで、50分の授業時間があっという間に経ってしまいます。「クリップを使った低分子(モノマー)と高分子(ポリマー)のイメージがおもしろかった」とか「身のまわりのプラスチックの材質を推定する密度実験がおもしろかった」などいろいろな反響がありました。

プラスチック教育連絡会の
パネル

出前授業の他にも、プラスチック教育連絡会として8月の全国中学校理科教育研究会と11月の関東甲信越地区中学校理科教育研究会に資料展示のため参加し、多くの先生方と意見交換をさせていただくことができました。中には、「プラスチックが大学の研究テーマだった」とおっしゃる先生もいらっしゃいましたが、多くの先生方は、大学でもプラスチックに触れてこれなかったということで、プラスチックに関する資料を大量に持ち帰っていただいています。さらに、密度実験に使うプラスチックシート標品や「プラスチックと私たちの暮らし」という無料の配布DVDをご活用戴いています。



関東甲信越地区中学校理科教育研究会の展示の様子

ある製品ができるまでの工程をクイズ形式で紹介する「工場見学」的なテレビ番組がありますが、プラスチック製品の製造現場を先生方に見ていただくことも何かのお役に立てるのではと考え、プラスチック教育連絡会では、プラスチックの製造会社の協力を得て、夏休みを利用し都内の先生方に製造現場をご案内しました。お馴染みのペットボトルの製造ラインでは、プリフォームからボトルが作られる工程を興味深く見学されると、「生徒たちにも見せたい」との声が聞かれました。この工場見学会が大変好評であったことから、プラスチックの製造にかかわる企業の方々のご協力を得ながら、来年度も企画したいと考えている次第です。

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(4)

木下 清隆

<前回とのつながり>

岡田精司氏の伊勢神宮に関する著作概要の続き。岡田氏は外宮の度会氏を切り口として、神宮の謎解きに挑んでいるが、このような伊勢神宮へのアプローチの第一人者。

() 内、筆者注

- ⑦ 神宮では「日^ひ別^と朝^あ夕^ゆ大^お御^お饌^け祭^{さい}」という祭典が行なわれているが、これは内・外両宮祭神に対して毎日朝夕神饌をそなえる儀式であって、この神事に奉仕するのは度会氏神主の一族から選ばれた二人の童女である。このような神事が毎日続けられているうちに、いつしか外宮祭神は女性神と考えられるようになったのであろう。豊受姫という名も食物神に共通する名称で、食物神を称える名としてはありふれた神名であったと思われる。また、外宮を丹波から移したと説くものは奈良朝までのものには全く見当たらず、延暦以降の文献に限られている。従って、『古事記』の成立から延暦の『止由気宮儀式帳』撰進までの間に、この説が生まれたとみられる。
- ⑧ 伊勢神宮が創建されたのは、書紀一書に出てくる丁巳^{ひのとみ}の年を基準として推定すると、四七七年の第二十一代雄略朝のことと考えられる。このことは神宮関係の諸書に外宮鎮座を「丁巳年」としているのとは一致している。この雄略朝伊勢鎮座は、日本書紀の雄略紀において伊勢関係の伝承が集中すること、斎王^{さいおう}任命は雄略朝以降ほぼ確実になること、祭祀遺跡から出た遺物、内宮の御神体を納める容器の形態等の考古学的な資料等から裏付けられる。

(「齋王」とは、伊勢神宮の神に奉仕する最高の巫女のこと。独身の内親王或いは女王から選ばれた。なお、ここに示されている四七七年伊勢神宮創建節は、ほとんど定説となっている。)

- ⑨ 大王家の守護神を伊勢の地に鎮座させた理由として、雄略朝前後の時期は社会的にも宗教的にも一つの転機に当たり、専制支配体制が確立されていく中で大王家の守護霊を諸豪族の守護霊の上に君臨させる必要があったこと、朝鮮半島をめぐる国際情勢は、高句麗が勢力を伸ばして南下し、半島での倭の勢力は衰退し始めていたこと、更には東国経営の推進等が考えられる。また、伊勢の地が選ばれたことについては、此処が大和盆地の真東に当たり大和の人々から神聖視されていたらしいこと、度会地方には太陽信仰の伝統があったこと、等が考えられる。

(大王家の守護神を伊勢へ移した理由は、ここに挙げられている以外のものもありうる。この点は後で、本考で更に論じる。)

- ⑩ 大王家の守護神が古くから太陽神(正確には太陽霊)であったことは疑いが無く、この守護神の祭場は非常に古い時代から難波の浜にあった。しかし五世紀中葉以降に宮都を大和に移してからは、一代一度の就任儀礼である八十嶋祭りのみを難波津で行い、平常の祭祀は都により近い高安山麓たかくらの「天照大神高座神社」で行われていた。(岡田氏は、大王が新しくその位に就くときは、難波津で八十嶋祭りが執り行われたことを別稿で明らかにしており、この内容はそのことを踏まえている。この⑩と次の⑪項を併せると、五世紀中葉以降に宮都が大和に移されたとき、守護神の太陽神は伊勢へ遷されたが、この神の平常の祭祀は高安山麓の「天照大神高座神社」で行われた、としている。)

- ⑪ 内宮には正殿とその後ろに荒祭宮あらかつりのみやとがある。記録に残された祭祀の手順、社殿の様式、荒祭宮の扱われ方等から判断して荒祭宮こそが古い太陽神の神殿であり、最初、河内から伊勢に移されたのはこの神と考えられる。このことは、『大同本記』逸文に度会氏の祖、大幡主命が神宮の鎮座に当って「荒御魂宮地」の造成に奉仕したことが出ており、それが内宮正殿ではなく、内宮の一つの別宮である「荒御魂宮地」とあることは注目される。また、齋王の本来奉仕する神は荒祭宮の祭神であり、更にこの神の妻となることであった。天照大神の別名が日靈ひるめとなっているのは、日の妻であることを示している。(岡田氏が荒祭宮こそ古い太陽神、日神の神殿であるとしていることは、きわめて重要な指摘である。このような荒祭宮に対する解釈は、内宮正殿こそ本殿と考えられて来ている歴史からみて、伊勢神宮の謎を解く重要な鍵となる。本考はこの説を踏まえている。また、荒祭宮創建に功績のあった大幡主命の話がここで紹介されているが、ここに出てくる『大同本紀』とは、大同二年(八〇七)に朝廷へ提出された、神宮関係の諸事項が記載された文書のことである。)

- ⑫ 大和朝廷の最高神即ち、国家的祭祀の対象となっていたのは三輪山の神であり、大王の宗教的権威は三輪山の神の霊威を背景とするものであった。これに対し、大王家の守護霊たる太陽神、即ち、日神は葛城かづらき



荒祭宮(遷宮以前)



大神神社

へぐり
・平群・紀等の臣系豪族の奉ずる守護霊と対等の、氏の中の祭祀対象に過ぎなかった。五世紀の後半になり大王権の発展に伴って、大王家の守護霊＝太陽神を倭政権の共同守護霊として、国家的祭祀の対象に昇格させようとする動きが出てきた。これが伊勢神宮の成立である。

(三輪山の神と、大王家の守護霊とは別神であるとの指摘は重要である。)

- ⑬ 荒祭宮に祀られていた古い日神は、大王家の祖神であるタカミムスビの神であったと推定される。この日神に奉仕する巫女から、巫女神＝日女ひるめの神として神格化されたのは、六世紀の比較的早い時期であったと考えられる。推古朝にはヒルメの神は、オオヒルメとして日神と対等に並ぶ存在にまで高められた。その後、この神は「天照日女之命あまてらすひるめのみこと」と称されるようになる。更に、壬申の内乱を克服し古代専制君主として頂点に立った天武朝によって、大ヒルメの神は単独の太陽神に昇格し、ここに天皇家の守護神としての天照大神は誕生した。このことにより太陽神は男神から女神へ大転換した。(ここの論理展開で重要な点は巫女が神になることと、日神と並立していたこの女神が単独で天照大神となることである。更に天照大神の誕生は天武朝であることが明確に示されている。この女神天照大神の誕生により、これまでの男神である太陽神、即ち日神＝タカミムスビの神は荒祭宮に封じ込められることになった。)

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いです。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

あっという間に2月は終わり今週から3月になりました。
今月は子供の小学校の卒業式。友人からは仕事を今月で変わる、引っ越しをするなど連絡があり、人それぞれの卒業の時期だというのを感じました。

卒業するということはまた新たな出発があるので初心を忘れず気を引き締めていきたいと思いました。(リマル)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp